

参加型スポーツイベントの選好構造: 市民マラソン大会へのコンジョイント分析の適用

A Preference Structure of Participatory Sport Event : An Application of Conjoint Analysis to City Marathon

スポーツビジネス研究領域

5009A039-8 小島 勇介

研究指導教員: 原田 宗彦 教授

1. 背景

昨今では数多くの参加型スポーツイベントが全国各地で開催されている(北村ほか, 2000; 野川・工藤, 1998). 特に, 東京マラソンの開催を契機に, 全国で市民マラソン大会の新設が相次いでいる(日本経済新聞, 2010). その背景には, スポーツイベントの大衆化や健康志向の高まり, さらには地域活性化策の一環としての開催地の期待が存在する(Getz, 2008; 北村ほか, 2000; 木村, 2009; 工藤, 2009; 野川・工藤, 1998; 山口, 2005). しかしながら, スポーツイベントを開催するだけでは, 地域活性化につながる社会的・経済的効果を得ることは困難であり, 戦略的なマーケティングの展開が重要であると工藤(2009)が指摘しているように, スポーツイベントの持続的発展や, スポーツイベントによる地域活性化を期待する場合には, 地域内外から多くの参加者を誘致しうる効果的なマーケティングを展開することが重要な課題となる.

スポーツマーケティングにおいては, スポーツ消費者の消費心理や消費行動を理解することが重要であると松岡(2008)が指摘しているように, 効果的なマーケティングを展開する上では, 消費行動を反映したデータから消費者のニーズを的確に捉えることが重要である(二宮ほか, 1993). とりわけ, 消費者のニーズの背景となる選好に関する情報は, 効果的なマーケティングを展開する上で有益であるとされている(二宮ほか, 1993; 豊田, 2009). 選好とは, 消費者が「選択対象について感じる主観的評価」(中西, 1984, p.5)であり, 「選択行動を規定する意思決定過程の最終段階において形成される態度である」(二宮, 2006, p.55). 本研究では, 参加型スポーツイベントのマーケティングを展開する上で有益な基礎資料を得るため, 参加者の選好に着目した.

選好と選択対象を構成する諸属性との関係を選好構造という(片平, 1984). レジャー・スポーツ研究においては, 特定のイベントを好んで選択するという意思決定に関する検証は不十分である(工藤, 2005; 野川・工藤, 1997)と指摘されているように, 参加型スポーツイベントに対する選好構造の検証はほとんど行われていないのが現状である.

2. 目的

そこで本研究では, 市民マラソン大会を事例として, ①参加者の選好構造を明らかにすること, ②参加形態と選好構造の関係を明らかにすること, ③選好構造を用いて参加者を類型化し, それぞれのセグメントの特性を把握することを目的とした.

3. 方法

選好構造の検証には, 幅広い事例で有効性が確認されている(二宮, 2007)コンジョイント分析を用いた.

(1)属性と水準の設定: 予備調査I・II, 専門家チェック

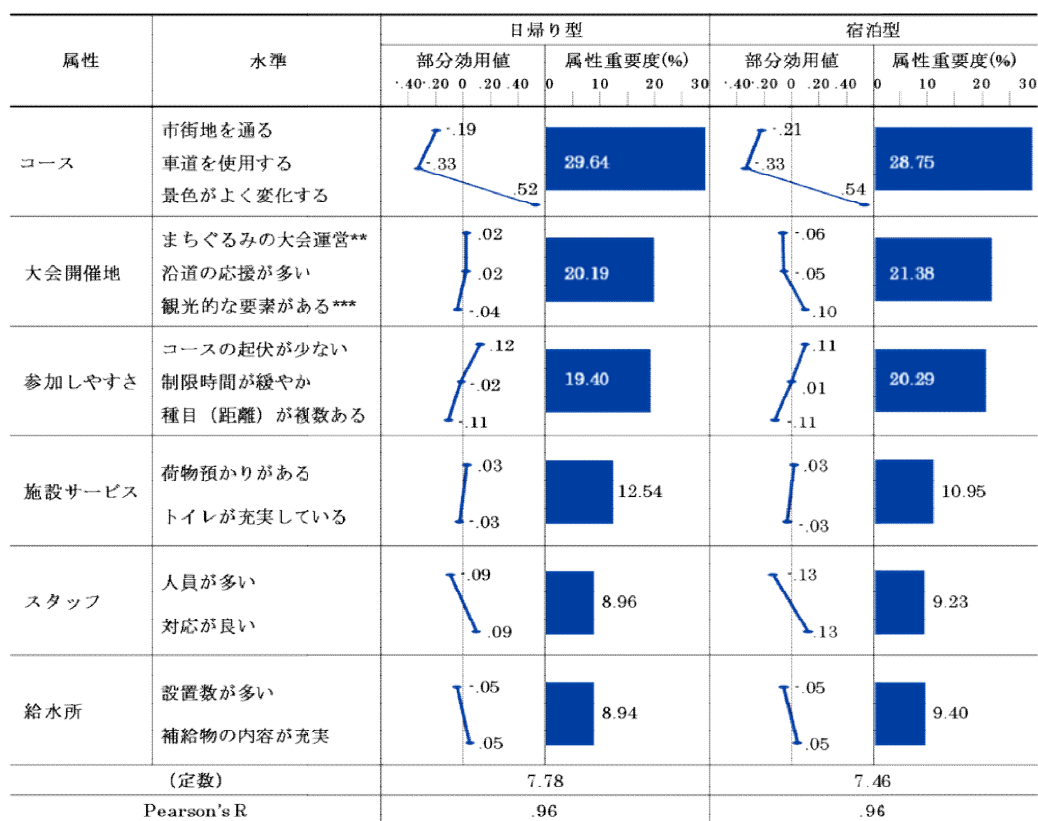
市民ランナー10名に対する半構造化インタビューを行った後, 専門家との協議を経て, 選好に影響を及ぼす18要因を抽出した. 次に, 属性と水準を設定するため, 2010年10月24日に開催された「2010 グリーンリボン・ランニング・フェスティバル」にて質問紙調査を実施した. 有効回答は318(回答率93.8%)であった. 先述した18要因を測定尺度とし, 「1:まったく重視しない」から「7:非常に重視する」までの7段階尺度で測定した. 探索的因子分析(最尤法・バリマックス回転)の結果, 6因子15項目が抽出され, 因子を属性, 各因子の下位尺度を水準として設定した.

(2)プロファイルの設定: 直交計画, プレ調査

回答の負担を軽減するため, 直交計画を用いてプロファイルを18に絞った. 次に, 効用値推定実験を行うため, 2010年11月19日に皇居外苑にて市民ランナーを対象とした質問紙調査を実施した. 有効回答は20(回答率83.3%)であった. コンジョイント分析(離散モデル・最小二乗法)の結果, 全ての部分効用値が算出され, 直交性に問題が無いことが確認された. さらに, ワーディングの修正を行い, 18のプロファイルを設定した.

(3)順序データの収集とデータ分析: 本調査I・II

本調査は, 2010年11月21日に開催された「戸田マラソン in 彩湖 2010」, および2010年11月23日に開催された「第33回府中多摩川マラソン」にて質問紙調査を実施した. 有効回答は, 287(回答率93.8%), 310(回答率89.9%)であった. 参加形態と選好構造の関係を検証するため, 大会に日帰りで参加することを想定して回答するもの(日帰り型)と, 宿泊を伴って参加することを想定して回答するもの(宿泊型)の2種類の質問紙を用意し, ランダムに配布した. それぞれのプロファイルカードは, 「0:参加したくない」から「10:ぜひ参加したい」までの11段階尺度で測定した. その他, 人口統計的変数, 行動的変数を設定した. プレ調査と同様にして部分効用値の推定を行った後, 参加形態と選好構造の関係を検証するため, 多変量分散分析およびt検定を行った. 次に, 属性重要度を基準変数とし, 階層的クラスター分析(平方ユークリッド距離・Ward法)および大規模ファイルのクラスター分析(K-means法)による参加者の類型化を行った. 最後に, 各クラスターの特性を把握するためにクロス集計を行い, カイ二乗検定および一元配置分散分析を用いてクラスター間の比較を行った.



***p<.001., **p<.01., *p<.05

図1 コンジョイント分析の結果

3. 結果と考察

(1) 選好構造の検討

市民マラソン大会に対する選好構造を検証するため、コンジョイント分析を行った結果、図1のような選好構造が得られた。モデルの適合性および信頼性を表す Pearson's R は、日帰り型、宿泊型ともに.96であった。

選好の過程で重視される属性は、その重要度の高いものから順に「コース」、「大会開催地」、「参加しやすさ」、「施設サービス」、「スタッフ」、「給水所」であった。部分効用値の傾向から、コースの「景色がよく変化する」ことや、「コースの起伏が少ない」ことは、その大会が好まれる大きな要因の一つになると考えられる。「施設サービス」、「スタッフ」、「給水所」については、水準の変動に対して選好に大きな反応が見られなかったものの、これらは大会満足度に影響を及ぼす重要な要因であり(北村ほか, 2000)、マネジメントの必要性が低いことを意味するものではないことを留意する必要がある。

次に、参加形態と選好構造の関係を検証するため、属性重要度および部分効用値に対して多変量分散分析を行った。その結果、部分効用値については帰無仮説が棄却され(Wilk's λ =.97, $F(10,586)$ =2.01, p <.05)、参加形態によって選好構造が異なる可能性が示唆された。続いて、差異が見られた部分効用値を特定するためにt検定を行った。その結果、「まちぐるみの大会運営」($t(555)$ =2.35, p <.05)、「観光的な要素がある」($t(532)$ =3.11, p <.01)において有意差が見られ、前者においては日帰り型の方が、後者においては宿泊型の方が高い値を示した(図1)。以上の結果から、参加形態に応じて、大会開催地が参加者に提供するベネフィットを変えていく必要があると考えられる。

(2) クラスターの検討

類似した選好構造を有する参加者を類型化するため、属性重要度を基準変数としたクラスター分析を行った。なお、多変量分散分析の結果、日帰り型と宿泊型で属性重要度に差異が見られなかったことから、ここではサンプルを区別せずに扱った。探索的にクラスター数を探るために階層的クラスター分析(平方ユークリッド距離・Ward法)を行った結果、3, 4, 5 クラスターに分かれることが推察された。次に、上記のクラスター数を指定して大規模ファイルのクラスター分析(K-means法)を試行した。その結果、「クラスターの規模」、「クラスターの距離」の観点から、4つのクラスターを採用した。

第1クラスターは、その地域で開催される大会に参加しなければ経験し得ないベネフィットを重視していると考えられ、「大会開催地重視タイプ」と命名した。第2クラスターは、参加者の視点に立った手厚いサービスや、その大会に参加してこそ走ることができる非日常的なコース設定が期待される大規模な大会を重視していると考えられ、「大会規模重視タイプ」と命名した。第3クラスターは、大会出場経験が豊富で、ランニングに強く傾倒した参加者から構成されており、自己新記録の更新が期待できる起伏の少ないコース設定を重視していると考えられ、「競技性重視タイプ」と命名した。第4クラスターは、大会出場経験が浅く、ランニングに傾倒し始めた参加者から構成されており、自分のレベルに応じた種目で楽しみながらマラソンに参加できることを重視していると考えられ、「非競技性重視タイプ」と命名した。以上の結果から、大会の特徴に見合うターゲット・マーケットを設定し、個別のマーケティング・アプローチを展開することが重要であると考えられる。